

ドイツにおける小学読本の歴史的展開 (1)

大槻和夫

一

ドイツにおける国語教科書の歴史の変遷について包括的に叙述した文献は、いまのところ見当たらない。とりわけ、二十世紀に入っ

てからの国語教科書の史的展開を跡づけた文献は皆無である。ところが、十九世紀末までの国語教科書(小学読本)の史的展開については、いくつかの著書・論文がまとめられている。インゲボルク・ハスの「文献目録」によれば、それには次のようなものがある。

1 H・フェヒヒナー「小学読本の歴史」(C・ケール『ドイツ語教授方法の歴史』ゴータ、一八七九年、一八八九年所収)

Fechner, H.
Geschichte des Volksschullesebuches

in: C. Kehr: Geschichte der Methodik des deutschen Unterrichts

Gotha: 1879 und 1889

2 G・ハイドナー「小学校における読本」(一八九一年)

Heydner, G.

Das Lesebuch in der Volksschule
1891

3 Th. クリービッチュ「読本のこと」(「ブランデンブルク州学校年報一八六〇年版」一八六〇年、七〇五〜七二九ページ)

Kreibitzsch, Th.

In Sachen der Lesebücher

in: Schulblatt für die Provinz Brandenburg, Jhrg. 1860, S. 705-729

4 C・J・クルムバッハ、J・G・シーバー「ドイツ学校読本の歴史と批判」(一八九四年、ライプツヒ)

Krumbach, C. J. und Sieber, J. G.

Geschichte und Kritik der deutschen Schullesebücher
1894 und 1896, Lpzg.

5 B・メンネル「小学読本の改革」(ランゲンザルツァ、一八九七年)

Maennel, B.

Zur Reform des Volksschullesebuches
Langensalza, 1897

6 W・ライン編「小学校における読本」(「教育学百科ハンドブック」ランゲザルツァ、一九一〇年二版所収)

Rein, W. (Hrsg.)

Das Lesebuch in der Volksschule
in: Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik

- Langensalza : 1910. 2. Aufl.
- 7 A・リヒター「読本問題について」(ライプツヒェ、一八八六年)
- Richter, A.
Zur Lesebuchfrage
Lpzg. : 1886
- 8 G・リーケ「読本の要件」(ドイツ第四年報一八四四年)第二冊、一八六(二二二ページ)
- Riecke, G.
Die Erfordernisse eines Lesebuches
in: Deutsche Vierteljahresschrift 1844, 2. Hft., S. 186-211
Lpzg. : 1898
- 9 K・V・シュトイ「小著・論文読本問題」(ライプツヒェ、一八九八年)
- Stoy, K. V.
Kleinere Schriften Aufsätze. Lesebuchfrage.
Lpzg. : 1898
- 10 H・ウェーバー「小学校上學年用読本への要請」(「プロイセン教育行政官報一八七四年版」四〇一〜四〇三ページ)
- Weber, H.
Anforderungen an das Lesebuch für obere Klassen der Volksschulen
in: Centralblatt für die gesamte Unterrichtsverwaltung in Preußen
Jhrg. 1874, S. 401-403
- 11 G・ツィーデルベルガー、パティスタ「小学読本その生成・基礎・実践的应用」(一九一五年)

Zeidelberger, G. und Battista, I.
Das Volksschullesebuch. Sein Werden, seine Grundlagen und seine praktische Verwendung : 1915

ここに示されている文献は、いずれも一九世紀における読本の歴史を知る上で重要なものであるが、これらをはるかにしのぐ労作として筆頭にあげられるべきは、なんといってもフェルディナント・ビュンガー著『小学読本発達史』(一八九八年)(Ferdinand Bün-ger. Entwicklungsgeschichte des Volksschullesebuches, Lpzg. 1898)である。『小学読本発達史』は、一九七二年、詳細な解説をつけて復刻され、その資料的価値は、いまでも高く評価されている。われわれが、ドイツにおける小学読本の歴史的發展を知ろうとするとき、その最初の手がかりを与えてくれるのも、本書であると言つてさしつかえない。著者は、歴史家として客観的な叙述にとめており、それゆえ本書は重要な「記録」たりえている。ただ、個々の資料の解釈には、当然のことながら著者の主観が色濃くあらわれており、本書の利用にあたっては、その点に注意を払ふ必要がある。

そこで、本稿では、ドイツにおける小学読本の歴史的發展を跡づける作業の第一歩として、ビュンガーの『小学読本発達史』の内容のあらましと、著者の立場とを、本書の目次と、編者インゲボルク・ハスの序文とを手がかりとして考察しておきたい。

二

はじめに、ビュンガー著『小学読本発達史』の目次を掲げる。

第一章 読本前史

第一節 宗教改革期における準備作業

一、小学校の古い陶冶源と新しい陶冶源

二、読本教材の用意への中世の参画

三、読み方教科書における世俗教材の増加

A 世俗的格言の進出 一五二四年

B 手紙の書き方と省略法の進出 一五二五年

C 算数教材の進出 一五二六年

D 世俗詩と入門詩の進出 一五三二年

E 実科的教材の進出 一五三三年

F 事物の名まえの進出 一五三四年

G 世俗的絵画の進出 一五三三年

H 文字解説の進出 一五三三年

J 聖者名の進出

K 句読点の理論の進出 一五三四年

L 意味のない文字の組合せ、あるいはA B | a bの進出

一五三四

M 礼法の進出 一五七二年

N 進んだ読者のための最初の読本 一五七二年

O 回顧

P 発達の停滞

第二節 実科的、近代的、実践的な読本への移行（十七世紀中葉か

ら十八世紀中葉へ）

一、十七世紀中葉の新しい動き

二、世俗的書写体教材の進出 一六四二年

三、自由な虚構の世俗的物語の進出 一六五〇年

四、特別の実科読本の登場 一六五七年

五、迷信防止のための教材の進出 一六五七年

六、公民科的教材の進出 一六九七年

七、人間科の進出 一六五七年

八、A B C 読本のまちがった方向づけ 一六九五五年

九、学校における新聞の読みに関する規定 一七三七年

第三節 読本の直接の先駆（十八世紀中葉）

一、よく整えられたオーストリアの小説本 一七四七年

二、プロイセン一般地方学事規定の読み方教科書 一七五七年

三、学校における詩及び他の文学教材の進出 一七六五年

四、最も早い時期のギムナジウム読本 一七六八年

五、バイエルン侯国のブラウン読書作品集 一七七〇年（子ども

の手紙交換と古典詩の進出）

六、クリスト・フェリックス・ヴァイセの新しいA B C 読本

一七七二年

七、バゼドウの読書作品集 一七七〇年

八、ヴェルツブルク侯国の読本 一七七二年

九、学校におけるドイツ愛国的教材の進出 一七七三年

十、低地オーストリアの表式読書作品集

第二章 幼少期の小学読本

第一節 ロヒョウの子どもの友

一、読本のためのフリードリッヒ大王政庁の努力

二、ロヒョウの読本集

a 作家としてのロヒョウ

b ロヒョウの、読本作成の動機

c 準備作業

d 子どもの友

- 1 その執筆
 - 2 発達史的潛勢力の使用
 - 3 素材の混合
 - 4 その外的調節
 - 5 ロヒョウの記述の言語面
 - 6 子どもの友の普及
- 三、その後のロヒョウの読本
- 第二節 ロヒョウの後継者
- 一、最初の市民学校用読本 一七八五年
 - 二、道徳教育教科書
 - 三、カレンダー式読本
 - 四、農業読本
 - 五、公民科的教材の支配
 - 六、入門書読本 一七八八年
 - 七、迷信、衛生学、実践的利益等をとくに考慮した公益的読本
 - 八、自然史的読本 一七八八年
 - 九、感傷的な考察を伴った読本 一七九六年
 - 十、宗教的話題のある読本 一八〇九年
 - 十一、教化的現実的読本
 - 十二、学校唱歌教科書としてのロヒョウの子どもの友の叙述
- 第三節 読本の自立的な前進的発達
- 一、郷土材料及び現代史からの伝記や愛国的物語の進出 一七八二—
年
 - 二、読本「グートマン」 一七九三年
 - 三、兵学校用と農村学校用の読本

四、将来の雇人用の読本

- 五、宗教的読本 一七八四年
 - 六、定評のある読本の集成の始まり 一七九二年
 - 七、読本の存続への攻撃
- 第四節 汎愛派の読本
- 一、カンペ 一七七八年
 - 二、ヴォルケ 一七八三年
 - 三、シュプリッテガルプ 一七八四年
 - 四、ザルツマン 一七九八年
 - 五、グラッツ 一八〇一年
 - 六、グーツ・ムーツ 一八一四年
 - 七、汎愛派の戯れ教材
- 第五節 ペスタロッチーの影響下の読本
- 第三章 言語論・論理学書としての読本
- 一、公益的性格から審美的論理的な性格への移行（ヴィルムセン、ツェレンナー）
 - 二、思想性と言語美を指向した作品
- A 審美的読本
 - B 古典的物語・伝記の集成
 - C 朗読読本
 - D 珍奇読本
- A 論理的要素の優位
 - B 文法の優位
- 1 抽象的文法的読本
 - 2 具体的文法的読本（いわゆるセンステンスメソッド、造語論）
 - 3 文法の補助手段としての例文集など

四、読本における発音主義、文法主義、実科主義の結合

五、形式主義的な方向の三つの後裔

六、形式主義的な方向の結果

七、寄りかかりの文法教授のための読本

第四章 愛国的感情の進出

一、政治的分立主義的傾向の読本 一八二九年

二、ドイツ史上への郷土的國家史の構築

三、ドイツ愛国的読本 一八四二年

四、全教科教育の中心としての読本

五、発達の状態に対しておこなわれている読本

A 過度の実科的内容

B 実科の押しもどし

C 郷土科的教材の後退

D 愛国的教材の後退

E 愛国的、宗教的顧慮の後退

第五章 今世紀中葉の読本

一、道徳的審美的な特徴から愛国的宗教的特徴への移行のうた

二、宗教への読本の基礎づけにおける誤り 一八三四年

三、世俗的教材の宗教への貫通 一八四二年

四、教訓的要素の占有における読本

五、ノイマルクにおける官制読本の先駆 一八四七年

六、プロイセン学校規定と読本 一八五四年

七、プロイセンにおける官制読本

八、ゴルチュによるポネル学校・家庭読本における宗教的読本

発達の高地点 一八五七年

九、個々の特徴にみられる、規定の読本への影響

十、規定の特徴をおびた、プロイセン以外の読本

十一、宗教的、宗派的、愛国的要素の別々の後退

十二、読本の自由な立場

第六章 最近の読本

一、非プロイセンドイツにおける移行

二、新しく獲得したドイツ領における移行

三、プロイセンにおける先進的発展

四、プロイセン教育行政による読本の検閲

五、誤れる方向づけ

A 無宗教性

1 この問題における「一八七二年十月十五日の一般規定」

の立場

2 宗教的教材の故意の押しもどし

3 混合宗教的編成学校用読本

B 読本の過度の広がりど部厚さ

C 文芸科的記事の強いあらわれ

D おくれた読本の発展の中で

六、将来の発展

A 官制読本の新しい編集

B 単級学校用の新しい本

C 大規模校用の新しい本

D ベルリンの読本

E 国境をこえて広がる読本

七、最近十年間のプロイセンの読本の注目すべき点

A 新教の読本

B カンリックの読本

八、よく使われている非プロイセンの読本

A 採用されている読本の、独占的にすぎる使用

1 学校当局自身の著作読本

2 唯一つ使用を認められた読本

B 自由な選択を認められた読本

九、下層の少女のための唯一の読本

十、オーストリアの新しいドイツ語読本

十一 実科読本争い

十二、ニュールンベルグの読本運動

十三、読本の統一

第七章 隔絶した生活領域、精神的傾向、学校形態の読本

一、移民したドイツ人学校用の読本

二、ヘルバルト派の学校の読本

三、カソリックの読本の発展の瞥見

四、ユダヤ人の読本

五、社会民主主義的読本

六、小学校との結びつきの中にある学校形態用の読本

A 日曜学校用

B 実業補習学校用

C 小学校教員検定試験準備施設・ゼミナール用読本

読本領域における研究者と蒐集家
結びに

現在使用中の教科書の目録
人名索引

われわれは、右の目次からだけでも、ドイツにおける小学読本の

史的展開のあらまし（ただし十九世紀末まで）を、ある程度うかがい知ることが出来る。とはいえ、本書の歴史叙述には、後にみるように、著者ビュンガーの思想や立場が反映しており、著者の述べるところをそのまま受けとってしまうのは危険である。そこで、ここでは、まずビュンガーの述べるところにも従いながら、ドイツにおける小学読本の史的展開を概観し、その後、著者ビュンガーの思想や立場に言及することにした。

三

中世の教育は、いうまでもなく教会の掌握するところであった。そこでの教育は、聖書や教義問答書を中心とした、ラテン語による教育であった。とりわけドイツでは、ラテン語の支配が強く、近代に入ってからフランス語が長く公用語にもなった。イギリス、フランスなどに比べて、ドイツにおける国語の確立はかなりおくれたのである。

ドイツにおける近代国語教育の胎動は、宗教改革の時代にはじまる。ドイツにおける宗教改革は、イタリアにおけるルネッサンスに相当するものであるが、ルターは、教会の権威に代わるものとして「神のことば」を主張した。中世が教会の権威にしばられた時代であったとするならば、その権威の支配を脱して「神のことば」に信仰の源泉を求めるルターの主張は、中世から近世・近代への黎明をつげるものであったと言わなければならない。よく知られているように、ルターは苦心の末、聖書のドイツ語訳を完成するが、それはまた古典語から国語への歴史的転換への第一歩でもあった。ビュン

ガーが「小学読本発達史」の始源を宗教改革期に求めたのも、ピュンガーの思想的立場とは別に、客観的にも根拠のあることであつたと言わなければならない。ピュンガーは宗教改革期にあらわれた小学読本の中に、それまでの聖書、教義問答書、讚美歌などにはみられなかった、いわゆる世俗的教材が増加していることを指摘している。つまり、世間の格言や詩、算数や事物の名称をはじめとする実学的実用的な内容の読みもの、新しいドイツ語表記法、言語主義的な入門教材など、庶民大衆の生活の必要にこたえる教材がしだいに増加してきているというのである。

とは言え、十六世紀はまだ宗教の時代であつた。実学的、実用的、近代的な読本への移行は、十七世紀の半ばから、十八世紀の半ばにかけて行われる。このころには、新しい書写字体も工夫され、それが教材にもとり入れられるようになってくる。読本の内容にも、いわゆる世俗物語や、実学的内容の記事や、公民的教材などが立ち現われてくるようになる。ピュンガーは、一八世紀中葉のドイツの小学読本の様相を、空間的な広がりの中で、克明に記述している。

ピュンガーは、十八世紀後半の小学読本を取り扱ふにあつて、とくにロヒョウとその後継者に一章を割いている。ロヒョウは、一七七三年、レッカーンに学校を建設し、自己の所領内の農民の友として、その子弟の教育に努力した人であるが、自ら筆をとつて農民の子どもたちのための教科書を書き、農民のための読本も書いている。ピュンガーによれば、ロヒョウの読本は、それまでの読本を十分にくみとり、よく理解したうえで作成されていること、教材を合目的に混合していること、それを短い形にまとめていること、子

どもの心と民衆の心とに適合していることなどに特徴がみられるが、古典語にはまったく考慮を払わず、歴史も考慮していないという。また、実用性を重んじる汎愛的、啓蒙的精神があまりにも支配的で、宗派的なことには何の考慮も払っていないという。そのとおりだとするなら、まさに啓蒙期の掉尾を飾るにふさわしい読本の典型をここに見ることができると言えよう。

ロヒョウの後を受ける読本は、ますます実科的内容への傾斜を深めていく。と同時に、道徳的、宗教的、教化的な読本も、一方では生まれてくる。「実科と精神」の統一よりもむしろその分化がみられるというべきか。

十九世紀の初めから二〇世紀の初めにかけては、国民的自覚が芽生え、強まっていく時代である。十八世紀末には、理性の万能を説き、実利を絶対の価値とみる啓蒙精神への反動として、人間性の回復を求める新人文主義が抬頭するが、それは、一面においてフランスの至上権に対するドイツ民族の反抗であり、もう一面は貴族・宮廷のフランス的教養に対する新興市民の反抗でもあつた。この新興市民階級こそ「国民」にほかならない。ピュンガーは、この期の読本を第四章でとりあつたてている。

一方、啓蒙期が去ると、実利一点ばりの読本から美と論理を重視する人文主義的読本へと移行する。その過程では、言語の形式を中心とする言語主義的読本もあらわれてくる。いわゆる「内容か、形式か」といった二元論が、ドイツにも発生したのである。これは、たんに国語教科書だけに見られるのではなく、国語教育論者の一つの重要な争点となつていったといつてよい。

十九世中葉にいたると、ドイツの小学読本は、いっそう愛國的宗教的性格を強めるにいたる。しかし、ビュンガーの思想的立場からすれば、十九世紀末の読本も必ずしも満足すべきものではなかったようである。第六章以下は、十九世紀末の小学読本の状況の叙述であると同時に、著者ビュンガーの理想の叙述である。

以上、ビュンガーの述べるところにも従いながら、ドイツにおける小学読本の史的展開をごく巨視的に概観してきた。

しかし、右の概観は、主として教材内容及び教育目的からのものであって、読本そのものの編成原理や教授原理からのものではない。また、小学読本は、ドイツ語（国語）確立の過程とともに歩んできているはずであるが、この点についても何もふれていない。これらについては、すべて今後の課題とし、ここでは以上の概観にとどめざるをえない。

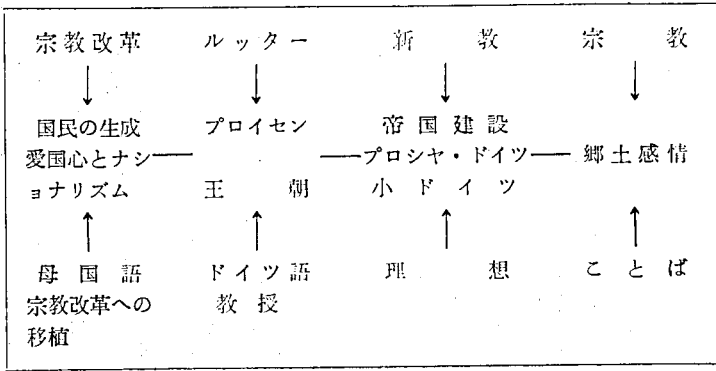
四

いかなる歴史叙述もそうであるように、ビュンガーの「小学読本発達史」もまた、その資料の意義づけには、著者ビュンガーの主観が入っている。そのことは、著者自身が「前書き」で断っているところであるが、今日のわれわれが本書を利用するにあたっては、とくに注意を要するところである。そこで、以下には、著者ビュンガーが、いかなる思想・立場に立って、小学読本の史的展開をとらえているかを、インゲボルク・ハスの「序文」（解説）にもよりながら、考察しておきたい。

フェルディナント・ビュンガーは、リューネブルクの視学官、師

範学校長であったが、バイエルン、ザクセンの援助者、同僚、リューネブルク師範学校の教師などの助けも借りて、多くの読本を集めて本書を執筆したという。彼は、とりわけ勤勉で慎重な人であったらしく、本書も、歴史家らしい客観的な叙述がみられる。多くの資料を盛りこんでいるのもその一つのあらわれで、本書が今日も高い評価を得ているのは、その記録性のゆえである。しかし、その資料の解釈にあたっては、彼自身、主観的であることを隠そうとはしていない。彼は、当時の政治的教育学的思想の中にどっぷりとつかっており、ドイツ帝国の支配的体制的な階層・階級の側に立っていた。ドイツ帝国の成立（一八七二年）から二十数年もたっているのに、彼はプロイセンを中心として考え、そのほかの州を「非プロイセン」とよんでいる。ドイツIIプロイセンとみる国家観、プロテスタントとしての世界観は、その資料の解釈にもあらわれている。たとえば、第六章で、読本を「プロイセン」と「非プロイセン」に分けているのなども、その一つのあらわれである。また、彼は本書の末尾にヘルダーのことは「宗教こそ人間の最高の人間性である」を引いているのも、彼の思想的立場を象徴的に示している。彼の目標とするところは、「ことば、郷土感情、そして宗教」であった。ビュンガーの「小学読本発達史」は、この方向を是とする立場から書かれており、そのことは、たとえば第六章で「誤れる方向づけ」として、A無宗教性、B読本の過度の広がりと部厚さ、C文芸科的記事の強いあらわれ、といったことをあげていることにもよくあらわれている。

ビュンガーの歴史把握はインゲボルク・ハスの次の図式によく示されている。⁹⁾



この図式にみられるように、ビュンガーは小学読本の史的展開の源を宗教改革期に求め、その後の展開はこの時期の読本に内在していた三つのモメントが、それぞれの時代にふさわしい形に「成長」

したとみているのである。今日の小学読本は、宗教改革期の読本に内在していたものが「成長」した姿であるところを歴史観に立って、ビュンガーは資料を整理し、配列しているわけである。それゆえ、ビュンガーは、十九世紀末の小学読本には、教育的に、あるいは文学的に、ある程度問題があるにせよ、いっそう価値多い目標に向かつて、絶えず生き続けているとみている。ビュンガーの目標とする「ことば・郷土感情・宗教」は、ビュンガーからすれば、宗教改革の読本にすでに内在していたものにはかならない。「その生の過程に目を向け、この精神的な過程から得られた教訓を確かめ、未来の形成に本書が役立つこと」を願って本書を書いたとビュンガーは述べているが、ビュンガーにとって、小学読本の史的展開はまさに「発達史」「発展史」であったのである。

たしかに、ビュンガーの言うとおり、その後のドイツの教育は、この方向で「発展」していった。小学読本による国民教育は、公民的意識を形成し、その公民的意識の統合力は、一八七一年の統一國家建設をめぐる内政上の争いを克服した。小学読本は、十九世紀ドイツの市民社会の国民政治的教育計画における道具であり、手段であった。ハスは、本書の「序文」を、次のことばで結んでいる。「小学読本には、全教育・授業理論の中で錯綜した機能がふりかかっている。それは、国家と社会との二元論が公民的意識の内容とならなかった時代の政治的陶冶・訓育の召使となった。小学読本の理想を求める努力は、この方向において、最初の不安を指し示すものであった。ビュンガーの叙述は、この関係を、新教的国民的思考と理解からの発展の弁護の試みによって、徹底的に記録している。」^①

熱心なプロテスタントであり、プロイセン王朝の発展としてドイツをみている保守的愛国主義者ビュンガールの思想・立場は、小学読本の史的展開のとらえ方の中に強くみられる。この歴史観は、十九世紀末のドイツを背景として生まれているものであり、その解明にはなお考察を必要とするが、ここではビュンガールの歴史叙述がいかなる思想・立場からなされているかを明らかにし、本書を利用するうえでの留意すべき点を指摘するにとどめたい。

五

十九世紀末は、ドイツにおいても、近代国語教育がほぼ成立した時期とみることができる。この時期に、本文だけで六〇〇ページ余にのぼる小学読本の歴史がまとめられていたということは驚くべきことである。国語教育論においても、この時期には、今日にも及んでいる基本的な問題は一応出そろっている感があるが、小学読本（国語教科書）についてはどのようなようであったか、これを第一歩として、今後なお考察を進めていきたい。本稿は、そのささやかな出発点をなすものである。

（本学教育学部助教授）

△注▽

① 復刻版「小学読本発達史」「序文」四二―四三ページ所収。

（なお、この文献目録には、「プロイセン小学校制度史文献」および「読本論・文学教育文献」の目録も付されている。）

② 「小学読本発達史」「序文」三五ページ

③ 「小学読本発達史」「序文」四一ページ